

2022年度

日本健康医療専門学校

シラバス (講義概要)

柔道整復学科

3年生

専門基礎分野	疾病と傷害	疾病と傷害3 (外科学)	
永井 恒志	医師・医学博士として19年、臨牀・研究・教育に従事している		
必修	2単位(30時間)	講義	3年次
<b>1. 授業科目の概要・到達目標</b>			
<p>〈概要〉</p> <p>柔道整復師は、骨折・脱臼・捻挫などの外傷の治療を行う。その外傷の程度によっては柔道整復師は応急処置のみを行い、その後外科医との連携が必要となる。</p> <p>〈到達目標〉</p> <p>本講義の到達目標として、柔道整復師として適切な応急処置を行うため、様々な外科的疾患の基礎知識を学び臨床現場で活用できるようになることである。</p>			
<b>2. 授業内容</b>			
第1回	損傷①	第21回	頭部外傷②
第2回	損傷②	第22回	胸部外傷
第3回	熱傷①	第23回	腹部外傷
第4回	熱傷②	第24回	移植と免疫
第5回	外科感染症①	第25回	手術
第6回	外科感染症②	第26回	出血と止血
第7回	腫瘍①	第27回	復習①
第8回	腫瘍②	第28回	復習②
第9回	ショック①	第29回	後期試験
第10回	ショック②	第30回	復習③
第11回	輸血①		
第12回	輸血②		
第13回	輸液		
第14回	消毒と滅菌		
第15回	麻酔①		
第16回	麻酔②		
第17回	心肺蘇生法①		
第18回	心肺蘇生法②		
第19回	前期試験		
第20回	頭部外傷①		
<b>3. 履修上の注意</b>			
外科学概論は幅が広いが内容は比較的浅いので点数は取りやすい。			
<b>4. 準備学習（予習・復習）の内容</b>			
内容は比較的浅いが外科学概論は幅が広いため知識を定着させることが重要である。			
<b>5. 教科書</b>			
外科学概論（医歯薬出版）			
<b>6. 参考書</b>			
<b>7. 成績評価の方法</b>			
定期試験の点数にて評価する。			
<b>8. その他</b>			

専門基礎分野	保健医療福祉と柔道整復の理念	保健医療福祉2（医学史）	
大城啓子	実務経験：接骨院勤務4年、ハローワーク職業訓練学校講師3年		
必修	1単位(15時間)	講義	3年次
<b>1. 授業科目の概要・到達目標</b>			
<p>〈概要〉</p> <p>本講義は医療・医学の歴史を振り返り学習する。病が人々に与えた影響や近代医学の歴史的な発展について学び、様々な視点で今後の医療に取り組む考え方を養う。医療人としての知識を養うとともに自らが将来の医療の発展に関わるという意識づくりを行う。</p> <p>〈到達目標〉</p> <p>現在の医療における柔道整復師という業ができるに至った歴史と流れを理解し、自らが医療の発展に関与していることを意識して臨床現場で業務を行う医療人となることを目標とする。</p>			
<b>2. 授業内容</b>			
第1回	医学史序説		
第2回	医学史の意義と特質		
第3回	西洋の医学と医療の歴史		
第4回	東洋の医学と医療の歴史		
第5回	日本の医学と医療の歴史		
第6回	現代医学の課題		
第7回	現代の医療制度		
第8回	最終評価		
<b>3. 履修上の注意</b>			
<b>4. 準備学習（予習・復習）の内容</b>			
<b>5. 教科書</b>			
医療概論（医歯薬出版株式会社）			
<b>6. 参考書</b>			
<b>7. 成績評価の方法</b>			
定期試験			
<b>8. その他</b>			
出席率、授業態度等、授業に対する姿勢も評価の対象とする。			

専門基礎分野	柔道整復の理念	保健医療福祉3（関係法規）	
大城啓子	接骨院勤務6年、ハローワーク職業訓練学校講師3年、柔整・鍼灸国家試験予備校講師4年		
必修・選択	1単位数（15時間）	講義	3年次
<b>1 授業科目の概要・到達目標</b>			
〈概要〉 患者を中心に考えられる医療従事者になるために、法律は禁止や罰則のためだけではなく医療の中での人権を守ることが目的であるということを念頭において、柔道整復師の資格とはどういったものか、また他の医療従事者の業務内容と比較し柔道整復師資格取得後の臨床現場での仕事内容（業務範囲）はどういったことなのかを法律や判例を学び理解する。			
〈到達目標〉 本講義は、接骨院等で医療従事者として仕事をする上での必要な法律（柔道整復師法他、医療関係法規）を学び、患者に対して良質で適切な医療を提供できる柔道整復師になることを目標とする。			
<b>2 授業内容</b>			
1回	序論		
2回	柔道整復師法 第1章・第2章		
3回	柔道整復師法 第3章・第4章		
4回	柔道整復師法 第5章・第6章・第7章		
5回	柔道整復師法 第8章・第9章		
6回	関係法規①		
7回	関係法規②		
8回	最終評価		
<b>3 履修上の注意</b>			
必修科目となるため、遅刻や欠席は原則認めない。			
<b>4 準備学習（予習・復習等）の内容</b>			
教科書を読み、わからない法律用語は事前に調べること。 受けた講義内容はその日のうちに復習すること。			
<b>5 教科書</b>			
関係法規			
<b>6 参考書</b>			
<b>7 成績評価の方法</b>			
定期試験（平常点も考慮）			
<b>8 その他</b>			
出席率、授業態度など、授業に対する姿勢も評価の対象とする。			

専門基礎分野	柔道整復の理念	柔道実技（柔道2）	
田村昌大	大学教員。講道館柔道五段。		
必修	1単位(40時間)	実習	3年次
<b>1. 授業科目の概要・到達目標</b>			
<p>〈概要〉</p> <p>1882年に嘉納治五郎師範によって創始された柔道は、現在200か国に普及発展を遂げている。柔道整復師における柔道実技は、理合いを体得することで整復実技等の応用力に繋がるものである。また、近年では国家試験問題としても採用されているため、技術だけではなく歴史的背景も解説しながら我が国発祥の競技種目を学ぶ機会とする。</p> <p>〈到達目標〉</p> <p>2年次に体得した礼法や受身や技術練習の反復練習を繰り返しながら、投の形の基礎および応用動作を学んでいく。</p>			
<b>2. 授業内容</b>			
第1回	2年次の復習	礼法	
第2回	2年次の復習	後方受身	
第3回	2年次の復習	側方受身	
第4回	2年次の復習	前方回転受身	
第5回	2年次の復習	投技	
第6回	投の形①	手技	
第7回	投の形②	手技	
第8回	投の形③	手技	
第9回	投の形④	腰技	
第10回	投の形⑤	腰技	
第11回	投の形⑥	腰技	
第12回	投の形⑦	足技	
第13回	投の形⑧	足技	
第14回	投の形⑨	足技	
第15回	投技①	連絡技	
第16回	投技②	連絡技	
第17回	投技③	連絡技	
第18回	投技④	応用技術の実践	
第19回	確認テスト		
第20回	最終評価		
<b>3. 履修上の注意</b>			
ケガ防止のため担当者の指示に必ず従うこと。			
<b>4. 準備学習（予習・復習）の内容</b>			
授業内で実施した内容を次の授業までに復習しておくこと。			
<b>5. 教科書</b>			
柔道実技虎の巻 森脇 保彦 著 メディアパル社			
<b>6. 参考書</b>			
<b>7. 成績評価の方法</b>			
確認テスト30%、実技テスト70% 授業態度や出欠状況にも留意すること。			
<b>8. その他</b>			

専門分野	基礎柔道整復学	柔道整復理論（総論）3	
佐藤洋平 新井啓之	接骨院勤務後、スポーツジムのメディカルトレーナーとして勤務。その後、専科教員として6年間従事。		
必修	4単位（80時間）	講義	3年次
<b>1. 授業科目の概要・到達目標</b>			
〈概要〉 病理学、一般臨床医学の頻出部位を中心に解剖生理学から疾患の病態生理まで復習していく。			
〈到達目標〉 頻出部位の内容に関してしっかりと理解し口述で順序だてて説明できるようにする。			
<b>2. 授業内容</b>			
第1回	病理学とは 疾病の一般	第21回	免疫異常①
第2回	循環障害①	第22回	免疫異常②
第3回	循環障害②	第23回	腫瘍
第4回	細胞障害①（退行性病変、代謝障害）	第24回	先天性異常
第5回	細胞障害②（退行性病変、代謝障害）	第25回	病因
第6回	進行性病変と細胞・組織の適応①	第26回	呼吸器の解剖生理と疾患
第7回	進行性病変と細胞・組織の適応②	第27回	消化器の解剖生理と疾患①
第8回	まとめ	第28回	消化器の解剖生理と疾患②
第9回	試験	第29回	代謝の解剖生理と疾患
第10回	フィードバック	第30回	内分泌の解剖生理と疾患①
第11回	免疫異常②	第31回	内分泌の解剖生理と疾患②
第12回	腫瘍	第32回	血液の解剖生理と疾患①
第13回	先天性異常①	第33回	血液の解剖生理と疾患②
第14回	先天性異常②	第34回	腎・泌尿器の解剖生理と疾患①
第15回	炎症①	第35回	腎・泌尿器の解剖生理と疾患②
第16回	炎症②	第36回	神経の解剖生理と疾患①
第17回	先天性異常	第37回	神経の解剖生理と疾患②
第18回	病因	第38回	膠原病の解剖生理と疾患①
第19回	試験	第39回	膠原病の解剖生理と疾患②
第20回	フィードバック	第40回	感染症の基礎と疾患
<b>3. 履修上の注意</b>			
教科書、ノートを持参。※時間は有限のため授業内での理解に努めるようしっかりと参加してください。			
<b>4. 準備学習（予習・復習）の内容</b>			
理解できなかった部分は質問をし解決させ後に残さないこと。			
<b>5. 教科書</b>			
病理学概論（第3版：南江堂） 一般臨床医学（第3版：南江堂）			
<b>6. 参考書</b>			
<b>7. 成績評価の方法</b>			
出席状況、授業態度、定期試験により総合評価。			
<b>8. その他</b>			

専門分野	臨床柔道整復学	柔道整復理論（各論）3	
大城啓子	接骨院勤務5年、ハローワーク職業訓練学校講師3年、柔整・鍼灸国家試験予備校講師3年		
必修	4単位(80時間)	講義	3年次
<b>1. 授業科目の概要・到達目標</b>			
<p>〈概要〉</p> <p>本講義は、柔道整復師が骨折・脱臼・捻挫などの治療を行う際に合併症としておこりうる内臓的損傷を理解するものである。柔道整復師が扱える程度の損傷かどうかの判断をし、必要であれば病院と連携を取るための解剖学的・生理学的な知識を身につける。</p>			
<p>〈到達目標〉</p> <p>医療従事者として患者対応をした際に解剖学的・生理学的知識から損傷を正確に判断し、説明ができるようになることを目標とする。</p>			
<b>2. 授業内容</b>			
第1回	総論、体液	第21回	骨と内分泌
第2回	血液	第22回	運動器に作用する内分泌
第3回	循環器の解剖と生理	第23回	神経の生理
第4回	循環の調節	第24回	神経系の構成、伝導と伝達
第5回	呼吸器の解剖と生理	第25回	神経と内臓機能
第6回	呼吸調節	第26回	脳の高次機能
第7回	泌尿器の解剖と生理	第27回	筋の生理
第8回	神経と排尿反射	第28回	骨格筋
第9回	定期試験	第29回	定期試験
第10回	消化器の解剖と生理	第30回	筋収縮
第11回	吸収、ホルモン	第31回	運動に関する中枢神経
第12回	肝臓と胆嚢と疾患	第32回	運動ニューロン、運動単位
第13回	栄養・代謝の基礎	第33回	反射
第14回	栄養・代謝と運動	第34回	姿勢と歩行
第15回	代謝と体温	第35回	特殊感覚
第16回	体温の調節	第36回	皮膚感覚、深部感覚、内臓感覚
第17回	内分泌について	第37回	高齢者
第18回	内分泌について	第38回	競技者
第19回	定期試験	第39回	定期試験
第20回	生殖と内分泌	第40回	最終評価
<b>3. 履修上の注意</b>			
<p><b>4. 準備学習（予習・復習）の内容</b></p> <p>授業前に1,2年生で学んだ各単元の内容を復習し、授業では不明な点を解決できるようにすること。</p>			
<b>5. 教科書</b>			
柔道整復学理論、解剖学、生理学			
<b>6. 参考書</b>			
一般臨床医学サブテキスト			
<b>7. 成績評価の方法</b>			
定期試験で評価			
<b>8. その他</b>			
出席率、授業態度等、授業に対する姿勢も評価の対象とする。			

専門分野	臨床柔道整復学	柔道整復理論（各論）4	
新才博紀	柔道整復師として臨床経験10年以上		
2単位	2単位(40時間)	講義	3年次
<b>1. 授業科目の概要・到達目標</b>			
<p>〈概要〉</p> <p>本講義は、柔道整復師が骨折・脱臼・捻挫などの治療を行う際の合併症（併発症・続発症・後遺症）から治療法と治療効果を考える。</p> <p>〈到達目標〉</p> <p>人体の構造と機能を考え、起こりうる合併症を想起できるようになることが到達目標である。</p>			
<b>2. 授業内容</b>			
第1回	上肢の骨と骨の名称		
第2回	上肢の骨格筋		
第3回	上肢の脈管と神経		
第4回	上肢の骨折と脱臼、合併症とその対策		
第5回	下肢の骨と骨の名称		
第6回	下肢の骨格筋		
第7回	下肢の脈管と神経		
第8回	下肢の骨折と脱臼、合併症とその対策		
第9回	上肢（肩関節、肘関節、手関節）の固定 実技		
第10回	下肢（膝関節、足関節）の固定 実技		
第11回	体幹の骨と骨の名称		
第12回	体幹の骨格筋		
第13回	体幹の脈管と神経		
第14回	体幹の骨折と脱臼、合併症とその対策		
第15回	頭部の骨と骨の名称		
第16回	頭部の骨格筋		
第17回	頭部の脈管と神経		
第18回	頭部の骨折と脱臼、合併症とその対策		
第19回	顎関節の固定 実技		
第20回	最終評価		
<b>3. 履修上の注意</b>			
<p>確認試験は正課規定時間外にも実施することもある。</p> <p>確認試験は正規評価と違い80点以上を合格とする。</p>			
<b>4. 準備学習（予習・復習）の内容</b>			
1年次・2年次で実施した内容はしっかりと復習しておく。			
<b>5. 教科書</b>			
柔道整復学・理論編			
<b>6. 参考書</b>			
柔道整復学・実技編			
<b>7. 成績評価の方法</b>			
確認試験、中間試験、定期試験、受講態度を勘案して評価する。			
<b>8. その他</b>			

専門分野	臨床柔道整復学	柔道整復理論(各論)5	
佐々木慎司	接骨院勤務		
必修	4単位(80時間)	講義	3年次
<b>1. 授業科目の概要・到達目標</b>			
<p>〈概要〉</p> <p>柔道整復実技は、解剖学、運動学に関連する教科であり、特に骨と密接に関わる血管と神経の機能を理解することで、臨床現場で活かされる教科となる。</p> <p>〈到達目標〉</p> <p>骨折に伴う血管および神経損傷と、そのメカニズムを理解することである。講義の進め方として、教科書の記載内容と臨床現場での実際を交えながら学習する。</p>			
<b>2. 授業内容</b>			
第1回	鎖骨骨折と血管・神経損傷 実技	第21回	骨盤骨折と血管・神経損傷 実技
第2回	肩甲骨骨折と血管・神経損傷 実技	第22回	腸骨翼骨折と血管・神経損傷 実技
第3回	上腕骨近位端部骨折と血管・神経損傷 実技	第23回	大腿骨近位端部骨折と血管・神経損傷 実技
第4回	上腕骨骨幹部骨折と血管・神経損傷 実技	第24回	大腿骨骨幹部骨折と血管・神経損傷 実技
第5回	上腕骨遠位部骨折と血管・神経損傷 実技	第25回	大腿骨遠位部骨折と血管・神経損傷 実技
第6回	前腕骨近位端部骨折と血管・神経損傷 実技	第26回	下腿骨近位端部骨折と血管・神経損傷 実技
第7回	前腕骨骨幹部骨折と血管・神経損傷 実技	第27回	下腿骨骨幹部骨折と血管・神経損傷 実技
第8回	前腕骨遠位端部骨折と血管・神経損傷 実技	第28回	下腿骨遠位端部骨折と血管・神経損傷 実技
第9回	手根骨骨折と血管・神経損傷 実技	第29回	足根骨骨折と血管・神経損傷 実技
第10回	中手骨骨折と血管・神経損傷 実技	第30回	中足骨骨折と血管・神経損傷 実技
第11回	基節骨骨折と血管・神経損傷 実技	第31回	足の基節骨骨折と血管・神経損傷 実技
第12回	中節骨骨折と血管・神経損傷 実技	第32回	足の中節骨骨折と血管・神経損傷 実技
第13回	末節骨骨折と血管・神経損傷 実技	第33回	足の末節骨骨折と血管・神経損傷 実技
第14回	肋骨骨折と血管・神経損傷 実技	第34回	膝蓋骨骨折と血管・神経損傷 実技
第15回	胸骨骨折と血管・神経損傷 実技	第35回	膝蓋骨骨折と血管・神経損傷 実技
第16回	脊柱の骨折と血管・神経損傷 実技	第36回	腰椎椎体圧迫骨折と血管・神経損傷 実技
第17回	脊柱の骨折と血管・神経損傷 実技②	第37回	腰椎椎体圧迫骨折と固定 実技
第18回	脳神経と脳に関わる動脈	第38回	骨折に伴う合併症とその対策
第19回	実技試験	第39回	実技試験
第20回	前期定期試験	第40回	最終評価
<b>3. 履修上の注意</b>			
臨床現場において非常に重要な科目となるので基本的に欠席は認めない。			
<b>4. 準備学習(予習・復習)の内容</b>			
前回の授業でやった内容は必ず各自で復習しておく。			
<b>5. 教科書</b>			
柔道整復理論、解剖学、運動学、生理学			
<b>6. 参考書</b>			
アトラス、骨折臨床学			
<b>7. 成績評価の方法</b>			
実技試験と定期試験の各試験で60点以上を合格とする。			
ただし、中間試験および小テストを実施した場合は定期試験の点数に加算する。			
<b>8. その他</b>			

専門分野	臨床柔道整復学	柔道整復理論（各論） 8	
新才博紀	柔道整復師として臨床経験10年以上		
必修	4単位(80時間)	講義	3年次
<b>1. 授業科目の概要・到達目標</b>			
<p>〈概要〉</p> <p>この講義は上肢の軟部組織損傷、下肢の脱臼を中心に講義をする。講義では理論的な内容を実施したうえでより臨床で役立つ知識を身につける。臨床現場に出た際に注意する点や見落としにならない点なども解説していく。実際の講義に際してはレントゲン写真や実際の患者の写真なども用いて視覚的にも理解できるように解説していく。また担当教員の臨床経験も交え解説していくことで外傷の発生や治療に対する興味を喚起していくことも狙いとする。</p> <p>〈到達目標〉</p> <p>各外傷の発生を理解した上で他の外傷との鑑別点も知り治療経過を知ること。</p>			
<b>2. 授業内容</b>			
第1回	ガイダンス	第21回	キーンベック病、マーデルング変形
第2回	肩関節の解剖	第22回	手指部の靭帯損傷①
第3回	肩腱板断裂	第23回	手指部の靭帯損傷②
第4回	上腕二頭筋長頭腱断裂	第24回	上肢軟部組織損傷検査法①
第5回	ベネット損傷、SLAP損傷	第25回	上肢軟部組織損傷検査法②
第6回	肩峰下インピンジメント症候群、リトルリーガー肩	第26回	上肢軟部組織損傷検査法③
第7回	動揺性肩関節、肩部の末梢神経障害、	第27回	股関節の解剖
第8回	五十肩	第28回	股関節脱臼①
第9回	上腕部、肘関節、前腕部の解剖	第29回	股関節脱臼②
第10回	上腕部の軟部組織損傷、肘関節部の靭帯損傷	第30回	膝関節の解剖
第11回	野球肘①	第31回	膝関節脱臼①
第12回	野球肘②	第32回	膝関節脱臼②
第13回	テニス肘、肘部のその他の疾患	第33回	膝蓋骨脱臼①
第14回	前腕コンパートメント症候群、腱交叉症候群	第34回	膝蓋骨脱臼②
第15回	前腕部の末梢神経障害①	第35回	足関節の解剖
第16回	前腕部の末梢神経障害②	第36回	足部の解剖
第17回	前腕部の末梢神経障害③	第37回	足関節部、足部、足趾部の脱臼
第18回	手関節、手指部の解剖	第38回	下肢脱臼総復習①
第19回	TFCC損傷、ド・ゲルバン病、手関節部の末梢神経障害	第39回	下肢脱臼総復習②
第20回	定期試験	第40回	最終評価
<b>3. 履修上の注意</b>			
<p>各疾患に対する検査法などが多数出てくることから講義には毎回必ず出席をすること。</p> <p>講義中も受身ではなく自分自身でも考えながら聴講するように努めてもらいたい。</p> <p>万が一、学習に遅れが生じるようであれば担当教員などに確認するなどの行動を取り遅れを取り戻すよう心がけてほしい。</p>			
<b>4. 準備学習（予習・復習）の内容</b>			
<p>講義前に柔道整復学・理論編(南江堂)も用いて該当範囲の範囲の予習をしておくことが望ましい。</p> <p>各外傷を総合的に理解するために毎回の講義を復習して次の授業に望むこと。</p>			
<b>5. 教科書</b>			
柔道整復学・理論編(南江堂)、柔道整復学・実技編(南江堂)			
<b>6. 参考書</b>			
標準整形外科学			
<b>7. 成績評価の方法</b>			
<p>基本的には定期試験の成績により評価する。ただし、担当教員により出席、小テスト、聴講態度なども評価対象として加味される。</p>			
<b>8. その他</b>			
講義を進める上で配布する資料を必ず使用するの持参すること。			

専門分野	柔道整復実技 5	柔道整復実技 5	
大野洋平	接骨院勤務歴10年、院長経験6年、接骨師会審査員4年		
必修	2単位(80時間)	講義・実技	3年次
<b>1. 授業科目の概要・到達目標</b>			
<p>〈概要〉</p> <p>前期：体幹骨折、頭蓋骨折、脊柱骨折脱臼と実技 後期：実技とケーススタディ</p> <p>〈到達目標〉</p> <p>柔道整復学 理論・実技に対する知識・技術を習得することが出来る</p>			
<b>2. 授業内容</b>			
第1回	オリエンテーション	第21回	実技：総合復習（整復・骨折）
第2回	骨折・体幹：肩甲骨骨折	第22回	実技：総合復習（整復・脱臼）
第3回	骨折・体幹：肋骨骨折、胸骨骨折	第23回	実技：総合復習（検査・軟損）
第4回	実技：下腿三頭筋肉離れ（診察と検査）	第24回	実技：総合復習（固定・骨折）
第5回	実技：アキレス腱断裂（固定）	第25回	実技：総合復習（固定・脱臼）
第6回	実技：復習	第26回	実技：総合復習（固定・軟損）
第7回	骨折・頭部：頭蓋骨骨折（脳頭蓋）	第27回	実技：臨床（理学検査）
第8回	骨折・頭部：頭蓋骨骨折（顔面頭蓋）	第28回	柔整理論復習：ケーススタディ
第9回	骨折脱臼・脊柱：頸椎	第29回	柔整理論復習：ケーススタディ
第10回	骨折脱臼・脊柱：胸椎、腰椎	第30回	柔整理論復習：ケーススタディ
第11回	実技：診察復習	第31回	柔整理論復習：ケーススタディ
第12回	実技：固定復習	第32回	柔整理論復習：ケーススタディ
第13回	実技：総合復習	第33回	柔整理論復習：ケーススタディ
第14回	柔整理論復習：演習問題	第34回	柔整理論復習：ケーススタディ
第15回	柔整理論復習：演習問題	第35回	柔整理論復習：ケーススタディ
第16回	柔整理論復習：演習問題	第36回	柔整理論復習：ケーススタディ
第17回	実技：診察復習	第37回	柔整理論復習：ケーススタディ
第18回	実技：固定復習	第38回	柔整理論復習：ケーススタディ
第19回	実技：総合復習	第39回	柔整理論復習：ケーススタディ
第20回	中間評価	第40回	最終評価
<b>3. 履修上の注意</b>			
<b>4. 準備学習（予習・復習）の内容</b>			
教科書を読む			
<b>5. 教科書</b>			
柔道整復学 理論編・実技編			
<b>6. 参考書</b>			
<b>7. 成績評価の方法</b>			
前期、後期定期試験をメインとする (小テスト、出席点、授業態度なども+αで考慮する)			
<b>8. その他</b>			

専門分野	柔道整復実技 6	柔道整復実技 6	
永井孝英	柔道整復師として25年。接骨院院長として20年		
必修	2単位(80時間)	講義・実技	3年次
<b>1. 授業科目の概要・到達目標</b>			
<p>〈概要〉</p> <p>柔道整復理論で身に着けた知識を基に、より実践的な能力を身に着けるべく、各部位の解剖学的知識から生理学的特性を理解していく。また各部位ごとの臨床的検査や鑑別疾患を正しく評価するべく技術を磨いていく。そして、各疾患に対する整復法や固定法を実施していく。</p> <p>〈到達目標〉</p> <p>柔道整復師として遭遇する疾患を正しく評価・鑑別し、その疾患に対する対処法を正しく理解するとともに、実施できる能力を身に着ける。</p>			
<b>2. 授業内容</b>			
第1回	肩関節周囲の解剖	第21回	膝関節周囲の解剖
第2回	肩関節周囲の運動	第22回	膝関節周囲の運動
第3回	肩関節周囲の検査法・評価法	第23回	膝関節周囲の検査法・評価法
第4回	肩関節周囲の整復法・固定法	第24回	膝関節周囲の整復法・固定法
第5回	肩関節周囲の後療法	第25回	膝関節周囲の後療法
第6回	肘関節周囲の解剖	第26回	足関節及び足指の解剖
第7回	肘関節周囲の運動	第27回	足関節及び足指の運動
第8回	肘関節周囲の検査法・評価法	第28回	足関節及び足指の検査法・評価法
第9回	肘関節周囲の整復法・固定法	第29回	足関節及び足指の整復法・固定法
第10回	肘関節周囲の後療法	第30回	足関節及び足指の後療法
第11回	手関節及び手指の解剖	第31回	頸部の解剖
第12回	手関節及び手指の運動	第32回	頸部の運動
第13回	手関節及び手指の検査法・評価法	第33回	頸部の検査法・評価法
第14回	手関節及び手指の整復法・固定法	第34回	頸部の固定法・後療法
第15回	手関節及び手指の後療法	第35回	腰部の解剖
第16回	股関節周囲の解剖	第36回	腰部の運動
第17回	股関節周囲の運動	第37回	腰部の検査法・評価法
第18回	股関節周囲の検査法・評価法	第38回	腰部の固定法・後療法
第19回	股関節周囲の整復法・固定法	第39回	顎関節の固定法
第20回	股関節周囲の後療法	第40回	最終評価
<b>3. 履修上の注意</b>			
必修科目となるため原則遅刻・欠席・早退は認めない。			
<b>4. 準備学習（予習・復習）の内容</b>			
臨床現場に出た際も実践できるように常日頃練習を怠らない。			
<b>5. 教科書</b>			
柔道整復理論・柔道整復実技			
<b>6. 参考書</b>			
<b>7. 成績評価の方法</b>			
実技試験・定期試験で評価をする。			
<b>8. その他</b>			

専門基礎分野	柔道整復実技7		柔道整復実技7
藤田みなと	整骨院に勤務し主に外傷に対する後療法を中心に、柔道整復業に携わる。トレーナーとして各種スポーツに携わり応急処置、アスレティックリハビリテーションなどを行う。		
八角卓克	柔道整復師として7年。大学での教育歴が3年。		
必修	3単位(120時間)	講義・実技	3年次
<b>1. 授業科目の概要・到達目標</b>			
<p>〈概要〉</p> <p>柔道整復師として備えるべく後療法の知識・技術・応用力を身につける。後療法に必要な評価法、治療法、高齢者に対する機能訓練などを詳しく学び現場で卒業後に現場で即戦力となる人材を育てる。またコメディカルとしてリハビリテーションについての知識を学ぶ。リハビリテーション医学の基礎や理学療法、作業療法など関連職種と関係しながら患者と接することができる柔道整復師の育成を目的とする。</p> <p>〈到達目標〉</p> <p>後療法に携わる他業種ともコミュニケーションが取れる医療用語が習得できる リハビリテーションについての知識を深めることができる。</p>			
<b>2. 授業内容</b>			
第1回	リハビリテーションの概念と歴史	第31回	介護の過程
第2回	障害の3つのレベルとアプローチ	第32回	高齢者介護とICF
第3回	患者のとらえ方	第33回	介護予防と生活機能の向上
第4回	身体計測	第34回	ロコモティブシンドローム
第5回	関節可動域測定法	第35回	高齢者自立支援の理解
第6回	徒手筋力テスト	第36回	機能訓練の評価
第7回	評価法（中枢性運動障害・痙縮・小児運動発達）	第37回	機能訓練の手順
第8回	心理評価	第38回	器具を用いない運動
第9回	日常生活動作	第39回	簡単な器具を用いて行う運動
第10回	障害学	第40回	定期試験
第11回	拘縮治療	第41回	物理療法について
第12回	筋力増強訓練	第42回	電気療法①
第13回	バイオフィードバック	第43回	電気療法②
第14回	痛みの治療	第44回	温熱療法①
第15回	理学療法	第45回	温熱療法②
第16回	作業療法	第46回	光線療法
第17回	補装具	第47回	寒冷療法
第18回	言語療法	第48回	牽引療法
第19回	リハビリテーション医学と関連職種	第49回	物理療法のプログラム
第20回	定期試験	第50回	物理療法の実践
第21回	脳卒中	第51回	運動とエネルギー代謝
第22回	脊髄損傷	第52回	競技者の運動生理学的特徴
第23回	小児疾患	第53回	検査・測定と評価
第24回	心疾患	第54回	コンディショニングの方法と実際
第25回	呼吸器疾患	第55回	肩関節・体幹部の外傷予防
第26回	整形外科的疾患	第56回	膝関節の外傷予防
第27回	手技療法	第57回	足関節の外傷予防
第28回	運動療法	第58回	成長期・高齢者の外傷予防①
第29回	発達と老化の理解	第59回	成長期・高齢者の外傷予防②
第30回	認知症の理解	第60回	最終評価
<b>3. 履修上の注意</b>			
<ul style="list-style-type: none"> <li>・「リハビリテーション医学」の教科書を必ず持参すること。</li> <li>・授業の最初に小テストを実施するので準備をすること。</li> </ul>			
<b>4. 準備学習（予習・復習）の内容</b>			
<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業中にまとめたノートやプリントを見直すこと。</li> </ul>			
<b>5. 教科書</b>			
「リハビリテーション医学 改訂第4版」（南江堂） 「全国柔道整復学校協会監修教科書 競技者の外傷予防」			
<b>6. 参考書</b>			
<b>7. 成績評価の方法</b>			
<ul style="list-style-type: none"> <li>・定期試験（90％）平常点（10％）で評価する</li> </ul>			
<b>8. その他</b>			